



平成30年度 基礎研修実施状況

研修部



東日本および西日本研修センターでは、平成30年度基礎研修を4月から8月にかけて実施しています（写真1）。受講生は、線路科110名、土木科50名、所内科160名、電力科30名、所内・所外統合科80名、総勢約430名です。

(1) 基礎研修の概要

基礎研修は各通信技術分野における基礎知識および安全の基本を修得し、情報通信エンジニアとしての素養をつけることが目的です。

各コースとも技術・方式はもとより、建設工事の基礎がポイントとなります。そこではNTT様の工事規格をベースに、座学と実習を通じてどのような決まり、考え方があるかを学びます。

安全確保は基本動作と危険予知が基本です。基礎研修の中でもKYT、危険体感等を取り入れるとともに、カリキュラムの要所要所に作業に潜む危険ポイント等を織り込み、技術を活かすには安全が前提であることの意識づけを行っています（写真2）。

西日本研修センターでは第1回基礎研修所内科において、株式会社ミライト・テクノロジーズHRD本部KAIZEN推進部部长 岩井喜照様より、入社してから今日にいたるまでのさまざまな業務経験で得られた、①目標の設定、②コミュニケーションの重要性、③管理能力など、企業人、社会人として必要かつ重要となる心構えなどをお話いただきました（写真3）。

また、日本コンクリート株式会社営業部長 濱中弘次様より「安全への挑戦 事故は必ず防げる」と題し安全講話をいただきました。濱中様は、社内で安全を担当す



写真1 朝礼での安全唱和



写真2 危険体感 (引込線切断)



写真3 (株)ミライト・テクノロジーズ 岩井部長講話



写真4 日本コンクリート(株) 濱中部長講話

るようになった経緯から説き起こし、自身の経験や数多く報道されている失敗事例を、どこが問題なのかを分かりやすく話していただきました（写真4）。

(2) 基礎研修の実施内容

① 基礎研修線路科 (14日間)

前半は電柱・支線等の構造物およびケーブル架渉・布設、接続などの通信線路建設について学習します。実習としてはCCPケーブルなどの切り出しから心線接続等を行います。後半は、光ファイバ線路設備および宅内設備について学び、実習にて融着接続、コネクタ作成、ク



写真5 東日本研修センター 第1回基礎研修線路科



写真6 西日本研修センター 第1回基礎研修線路科



写真7 東日本研修センター 第1回基礎研修土木科

ロージャ取付けなどの工法を習得します(写真5・6)。

所外系の工事には高所作業はつきものですので、電柱昇降、高所作業車の取扱い実習、転落等の危険体感を一通り行い、安全の基本知識・認識を醸成します。

② 基礎研修土木科(13日間)

通信土木設備の概要、建設における共通事項および地下管路工事等の基礎知識を学んだ後、機械を使わずマンホール・管路掘削、土留め、配筋、試掘等をグループに分かれて実習します(写真7)。

また、平面・縦断図、マンホール展開図など各図面のポイント、設備記録や写真記録などを学習し、図面確認と合わせて埋設物探査についても行います。

土木の作業安全については安全作業手順に則った管路・マンホール建設方法、過去の設備事象事例を活用した対策など多様な内容を学びます。

③ 基礎研修所内科(11日間)

交換伝送については、通信方式のベースとなるデジタル通信技術、各装置・サービスに応じた信号処理方式、



写真8 東日本研修センター 第1回基礎研修所内科



写真9 西日本研修センター 第1回基礎研修所内科

その上で通信方式の主流となったTCP/IP技術とNGN等の装置概要を学びます。実習ではルータ設定を中心にIP通信の基本を確認する機会としています(写真8・9)。

無線については電波の性質、種類、変調方式などの基礎と、方式としては固定無線と合わせて、移動無線の内容を多く取り入れています。

④ 基礎研修電力科(8日間)

電力は、各設備への供給となることから、各種通信設備概要から始まり、通信用電力技術および設備の基礎について座学を行い、実習では感電・短絡防止のための養生を始め、電力ケーブル工事、ラックへの吊り込み、耐圧試験ほか各種測定等を実施します。

東日本研修センターのトピックスとして、低圧電気取扱業務特別教育課程について安全衛生特別教育規定を満足するべく従来の学科のみから実技を加えたものとし、基礎研修日程に連続した形で実施することとしました。

⑤ 基礎研修統合科(22日間)

基礎研修線路科と同所内科を合わせた内容です。

(3) おわりに

新入社員にとっては、はじめて接する用語、決まりの理解が大変だったかと思います。一方で、同年代の仲間と基本知識を体系的に学んだことや、グループ演習や実習は貴重な体験であったことでしょう。

今後、受講生のみなさんが、安全の上にスキルを磨き、情報通信エンジニアとして成長されていくことを願っております。